

二次会のあと

眉村 卓



講談社
文庫
社文庫

に じ かい
二次会のあと

まゆむら たく
眉村 卓

© Taku Mayumura 1986



講談社文庫
定価360円

昭和61年 6 月15日第 1 刷発行

発行者——野間惟道

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2 12 21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——株式会社東京印書館

印刷——株式会社東京印書館

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。(庫一)

ISBN4-06-183762-1 (0)



講談社文庫

二次会のあと

嵐村 卓

講談社

目次

バッジ

監視

資格魔

乗りかえた日

梅雨

同室の連中

叫ぶ草

根なし花

協定

同居者

冬眠の前

顔

吹きだまり

二次会のあと

解説

常盤新平
二五

七

三

元

五

四

九

六

五

四

五

三

九

三

七

二次会のあと

バッジ

退勤の、電車の中。

安田武男は、先ほどこらいらいらしていた。

彼の横にすわっているふたりづれのOLが、ハワイ旅行がどうの、何とかのハンドバッグがどうの、と、喋り合っているのだ。

それだけではない。

OLたちの正面に、大きな荷物を持った老人が乗り込んで来て、両手がふさがっているものだから、電車が揺れるたびによろけているのに……知らん顔なのであった。

中年にさしかかった年代の安田としては、OLたちの会話だけでもいい加減不愉快だったのに、事態がこうなつて来ると、顔がひきつりそうになるのを、辛うじて抑えているのである。

全く……レジャーもおしゃれも結構だが……独身貴族を鼻にかけるのも結構だが……そんな若さと余裕があるのなら、せめて、老人に席を譲る位のやさしさがあつたって、いいではないか。と、そんなことを考えるのが身勝手だとは、彼にも分っている。彼だってすわっているからだ。

自分が席を譲ればいいのである。

しかし、疲れていた。この二、三年、急速にスタミナがなくなって来たのを自覚しているし、おまけに連日の会議で、すっかりへたばっている。だからこそ、わざわざ電車を一台遅らせて、すわったのだ。立つのは、つらいのであった。

OLたちは、依然として、老人には無関心である。

何という奴らだ。

こうなれば、やむを得ない。

「どうぞ」

彼は、斜めむかいのその老人に声をかけ、OLたちに、たっぷりいやみをこめた視線を投げながら、席を立った。

「ああ……どうも……助かりました」

老人は、ほっとした声を出して、彼のあとにすわる。

けれども……OLたちは、いっこうに気にする風もなかった。やはり、らちもないことを、ぺちやくちやと喋っているだけであった。

「……………」

彼は、数秒間、OLたちをみつめていたが、すぐに、さりげなく別の場所へと移動して行った。そんなことをしている自分が急に馬鹿馬鹿しくなったのと、それに席を譲った人間がいつまでも前に立っているのは、老人が氣詰まりだろうと思ったからである。

一時間近い立ちん坊のち、安田は電車を降りた。

夜風のつめたいプラットホームを五、六歩進んだとき、うしろから追いついて来た者がある。

「失礼ですが」

と、そいつは声を掛けた。

「は？」

「あなたは、大変立派なことをなさいました」

そいつはいう。「お年寄りに席を譲ってあげるとは……うれしいことです」

「……………」

彼は足をとめて、相手を見た。

彼より三つか四つ上の……平凡な、四十歳位の男である。

この男、さっきの様子を眺めていたというのか？

そのようだ。

が……そうだとしても、なぜ、わざわざこんなことをいうのだ？

何のつもりか知らないが、一応、ありきたりの返事をしておけばいいだろう。

「いや、別に大したことじゃありませんよ」

いい捨てて、彼は歩きだそうとしたが、相手はしつこかった。

「聞かせて下さい」

そいつはたずねるのだ。「失礼ですが……あなた、協会のバッジをお持ちですか？」

「協会のバッジ？」

「小さな親切表彰協会のバッジです」

「いや」

そういえば、そんな名の会を聞いたおぼえはある。同じではないかも知れないが、小さな親切うんぬんと称する会があったようだ——と思いながら、彼は答えた。「——いや。持ってませんが」

相手はうれしそうな顔になった。

「そうですか。それは良かった。実は、私はそのメンバーでして……小さな親切を目撃すると、表彰することになっているんです」

「表彰……ですか？」

「表彰です」

相手はまじめな表情でいう。「小さな親切に関する会はいろいろありますが、私たちの協会は、それを表彰するのです」

「……………」

「私は、あなたの行為を表彰します」

そいつは、背広のポケットから、小さな箱を出した。「これをあなたに贈ります。どうか、受け取って下さい」

「……………」

「これは表彰バッジです。私たちの志です」

「そんな」

やっと、彼は口を開いた。「そんなもの、頂くわけには行きませんよ」

「そうおっしゃらずに、どうぞ。ささやかなものですし、別に、服につけてくれなどとはいいません。箱を開けて、中のバッジを持っていて下さればいいのです」

「しかし」

「どうか、箱を開いて下さい」

「……………」

開くだけなら、何ということもないだろう、と考えて、彼は箱を受け取った。ありふれた桐の小箱で……かなり硬い蓋を外すと、紙包みが出て来た。

包みの中に、円形のバッジがあった。黒地の上に、三重の金色の同心円というデザインだ。包み紙には、文字が刷られている。

「読んで下さい」

相手にいわれ、彼はそれを駅の灯にかざすようにして、読んだ。

おめでとう。

これは、あなたを表彰するバッジです。

バッジは、はじめて箱を開けたあなたに同調されました。いつまでもあなたのものです。表彰されたあなたが、さらに進んで協会員になり、小さな親切を見掛ければその人を表彰してやろう、という気になったら、次の番号へお電話下さい。協会費は不要です。

そして、電話番号がしるしてあった。

何だ？

何だこれは？

彼がもの問いたげな目を向けたとき……だが、相手はいつの間にか、いなくなっていた。いや。

足早に出口のほうへ去って行くうしろ姿が見える。

追おうか。

とても間に合いそうもない。

ま、いいだろう。

変な人だが……それにこんなバッジを作って渡す協会があるとは物好きな連中がいるものだが……とにかくあずかっておこう。何かうるさいことをいつてくれば、返せばいいのだ。

彼はバッジを紙に包み直し、箱に入れるとポケットに突っ込んだ。

翌朝。

食事を終りネクタイを締めている安田に、妻の礼子がいった。

「ね、これ何？」

「え？」

目だけ向けると、礼子は、ゆうべのあれを持っていた。

右の手のひらにバッジ、左に箱と紙片を載せている。

「あなたのポケットに入っていたのよ」

と、礼子。「小さな親切の表彰って、何のこと？」

彼は、手短に、きのうのことを話した。

「何だか、気味が悪いわ」

礼子は眉をひそめた。「そんな……行きずりの人に表彰だなんて。——こんなもの、捨ててしまつたら？」

彼は、肩をすくめた。

「とも、思つたんだがね。返してくれといわれたら厄介だし……そのへんに置いておくぶんには、何ということもないだろう。ちよつと綺麗だしね」

「そうかしら。わたし、いやな感じがする」

「気にしない、気にしない」

彼は笑いながら、靴をはき、おもてへ出た。

そうはいったものの、心の底に不安に似たものがあつたのは、事実である。

五分も歩くと、バス停だ。

バスはすぐに来た。ひとつ手前が折り返し点なので、ときにはうまくすわれる場合がある。今朝もすわれた。

バスは小刻みに停車しながら、私鉄の駅に近づいて行く。それにつれて、車内はどんどん混むのだった。

彼の横に、子供連れの女の人が出て来た。

とたんに、彼は、席を譲るべきではないかという強迫観念にかられはじめた。ゆうべ、あんな表彰バッジとかいうものを貰ったせい、か、立たなければ悪いような気がするのである。どうにも、いたたまれないのだった。

彼は席を譲った。

こんな真似を出勤途上にやっていると、不必要な疲れを背負い込むことになるぞ、と、自分自身をいましてみたが……立ったために、心理的負担が消えてしまったのはたしかだった。

電車の駅に来る。

都心からだいぶある駅なので、このあたりではまだ電車はがらがらだ。立っているのが不自然である。

だから、シートに腰をおろした。

いつもの通り、一駅ごとに乗客が入って来ると……もういけなかった。立たなければならない。

誰かに、席を譲らなければならない。

いくら抑えよう抑えようとしても、その衝動が襲って来るのだ。何も、いつもそんなことをしなくたっていいではないか、と、おのれにいい聞かせても、駄目なのである。席を譲らなければ、落ち着かないのだ。

それでもしばらくは辛抱し……とうとうたまりかねて、彼は、適当な相手を見つけると席を譲った。相手は、奇特な人だといったげに、それでも礼を述べて、彼の厚意を受けてくれた。おかしいぞ。

離れたドアのそばに突っ立ち、電車に揺られながら、彼は考えざるを得なかった。

どうして、こんなことをやらなきゃならないんだ？

席を譲らないと、いてもたってもいられないなんて……どういうわけだ？

自分はそれほど博愛主義者ではない。

やはり、あいつに、あんなものを貰ったおかげで、義務感が生じているのだろうか？

何気なくズボンのポケットに入れた彼の指が、ふと、小さな固いものに触れた。

出してみると……バッジだ。

きのう貰った、小さな親切表彰協会のバッジなのだ。

これは、たしか……礼子を持っていたのではないか？　それが、なぜポケットにあるのだろうか。

礼子が彼の知らぬ間に、ポケットに入れたのだろうか？

いずれにせよ、こないまいましいものは、もうたくさんだった。こんなものを持っていたく